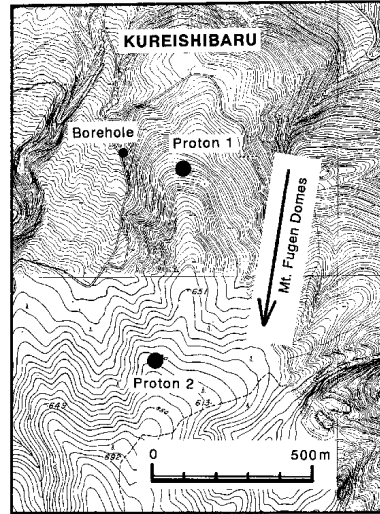
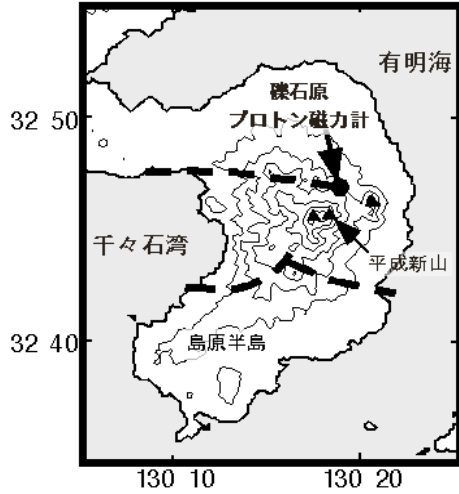
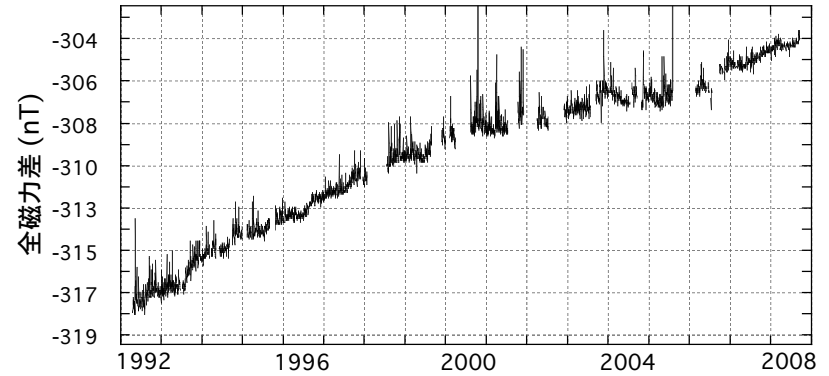


雲仙岳北麓における全磁力変化

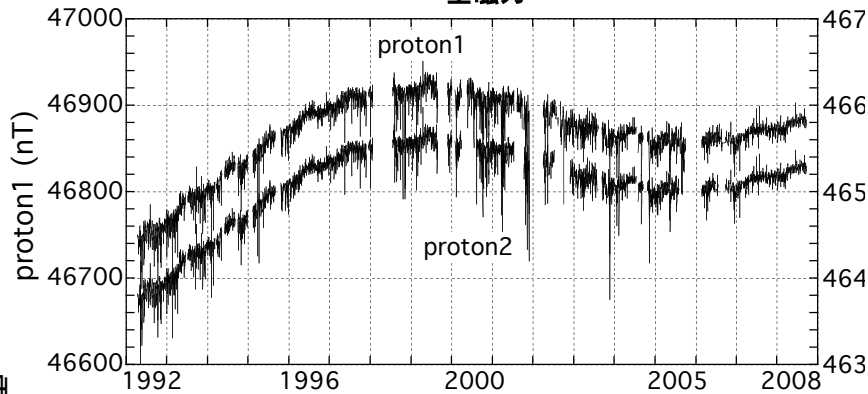


全磁力差 (単純差)

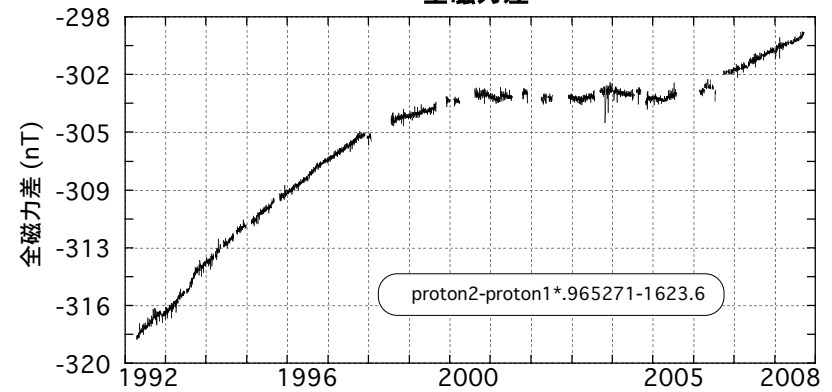


単純差では約1.2nT/yrの増加傾向が見られる。このうち両地点には1度05分の伏角の違いがあり、最近の九州地方の地磁気永年変化(垂直分力+30nT/yr)を考えると、約+0.4nT/yrは永年変化で説明できる。

全磁力



全磁力差



2地点の全磁力差のばらつきが最小になるように1992年5,6月のデータを使用して係数を決定した。2000年より全磁力差が頭打ちとなり、消磁傾向がおさまった。2006年より消磁傾向が見えるが、これは磁力計#1周辺の大規模な森林抜粋の影響の可能性もある。